

4. む す び

1 ランドレース種の発育は気候・飼料・環境・育成技術等により差があるが、全般的に后軀の張りは良好であるが、雄は胸巾・雌は胸囲・胸巾・体高の不足が見られる。

2 分娩頭数が初産に比較して2産目が少なかったのは、輸入による環境の変化と疫学的な問題があるものと思われる。すなわち2産目に至り初めて夏を経過したため黒子、死産の発生が1腹平均1.28頭が出現し初産に比較して平均1.14頭多かつた。又3産4産を経過するにつれ産子数の増加が見られ漸次能力の向上が見られる。

3 在胎日数は113日から117日で平均115.01日で、ヨークシャー種より1日長い傾向がみられる。

4 生時体重は初産平均1.32kg、2産平均1.47kgで大型のものが多く見られる。

5 陣痛は一般に微弱の傾向があり、分娩補助を要する場合が多い。

6 分娩時間はヨークシャー種の場合と大差ない。

7 母豚の泌乳量が多いため子豚の発育が良好な反面母豚の栄養維持がむずかしく、分娩哺乳による体重の増加が顕著であり、又哺乳による母豚のやせ方が甚だしいので早期離乳を行う必要がある。

8 垂れ乳のものがなく飲み易く、子豚の吸飲力も強いので子豚の発育が均一である。

9 失格欠点が初産に17頭、2産で9頭出現したが体をふるわせるものの出現はなかつた。これらの失格事項のうち畸形の出現率は初産4頭5.47%、2産5頭8.92%でスエーデン系に間性の発現が1頭見られた。

10 餌に対する食付もよい方でないが、馴れるに従いよくなり、30日前後の離乳も困難でない。

11 登記率は分娩頭数即ち哺育開始頭数に対し初産58.9%2産66.07%であつた。

12 体重の割に四肢及び蹄が弱く下肢に故障が発生し易い傾向があり、特に育成豚は運動を課することが必要であり、要すれば広い運動場に放牧することが望ましい。

13 輸入豚に全身性けいれん症(特に肩部、四肢に甚だしい。)症状を呈するものがあるが、その遺伝性と実害の有無については今後の研究課題である。

養豚飼料構造実態調査

利用品目出現頻度について

近藤 洋・石田武男・山崎喜三郎
今 功・岡田光男

(青森県畜試)

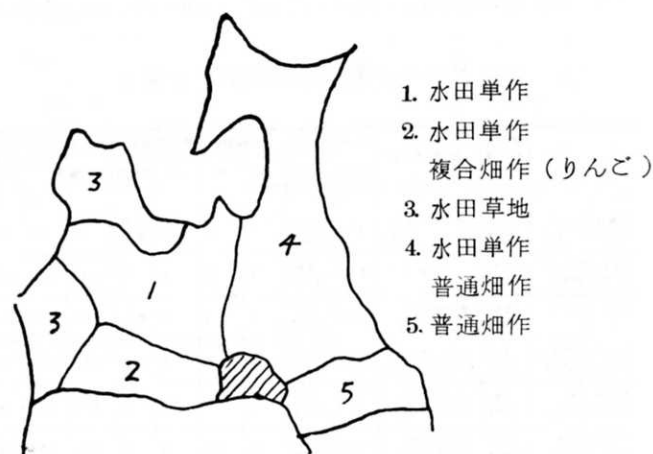
1. ま え が き

畜産の振興に伴ない、養豚も今後ますます盛んになる気運にあるが、一戸当りの飼養頭数規模はここ当分の間は所謂零細規模からせいぜい副業の規模に留まることが予想され、その様な状態では、その収益性に大きく影響する飼料については自家農業副産物の積極的利用が特に大切である。

しかし、それについては殆ど計画的な利用が行われていない現況にあるので、今後の合理的利用法を確立することが必要である。そのための基礎資料を得る目的で青森県内養豚農家における飼料構造の実態調査を行つた。

2. 調 査 方 法

養豚における飼料構成は、種々の営農類型下で異なることが予想される。第1図は本県における農業地帯区分を示すもので、これらのうち、津軽水田単作、水田りんご作地域、上北、三戸郡の田畑、普通畑作地域、それに



第1図 青森県農業地帯区分

都市近郊および沿海地区を加え、6農業地域から資料に基づいて養豚密度の高い市町村を選定し、それぞれ30戸の養豚農家について実態調査を行つた。(第1表)。調査時期は、昭和38年12月および39年1月である。

第1表 調査地点一覧

農業地帯区分	市 町 村 名	調査戸数
田 畑 混 合	五戸町、百石町	30戸
普 通 畑 作	横浜町、六戸町	30々
水 田 単 作	常盤村、田舎館村	30々
水田・りんご作	板柳町、藤崎町	30々
都 市 近 郊	青森市、弘前市、八戸市	30々
沿 海	大畑町、蟹田町、八戸市	30々

3. 結果の概要および考察

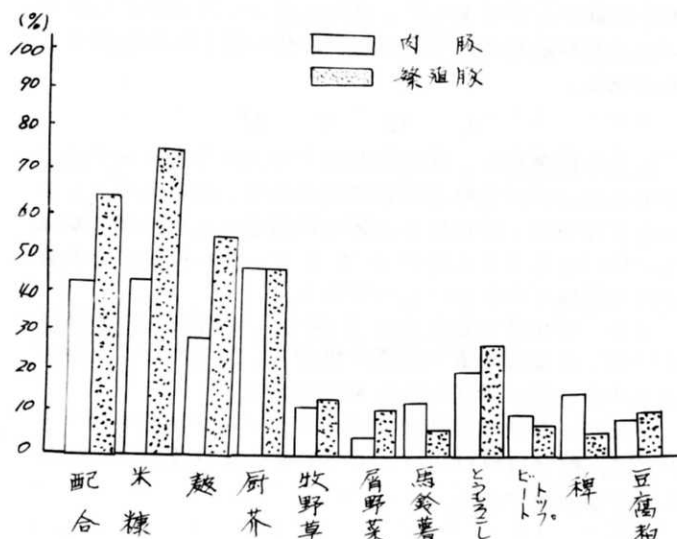
1 利用品目について

品目数は20種類をこえ、農耕副産物が著しく多く、これはいろいろな意味での剰余副産物を最大限に利用しようとする態度のあらわれである。

2 地域別出現頻度について

出現頻度の表わし方は、各品目について利用する農家の調査戸数に対する割合を以て行つた。その概要は次の通りである。

(1) 田畑混合地域：利用品目は多数を占め、第2図に示すもののほか、麦類、ボンキン、ビートパルプ、大豆等が用いられる。りんご園下草を利用したグラスサイレーズの調整、給与が1例見られた。



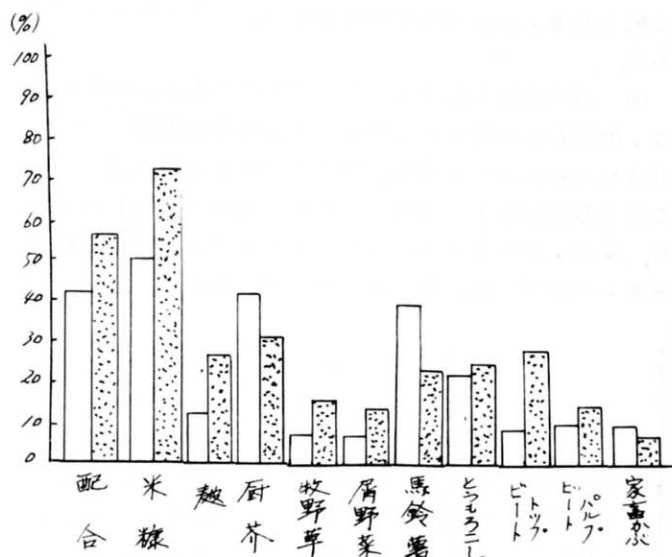
第2図 田畑混合地域（五戸町、百石町）

(2) 普通畑作地域：田畑作地域と大体同じ傾向にあり、第3図に示すもののほか、麦類、ボンキン、稗、ナタネニンジン、豆腐粕等が用いられ、利用品目数は多い。馬鈴薯、米糠およびビートトップによる混合サイレーズの調整が1例見られたが、概してサイレーズの調整、給与は殆んど行われていない。

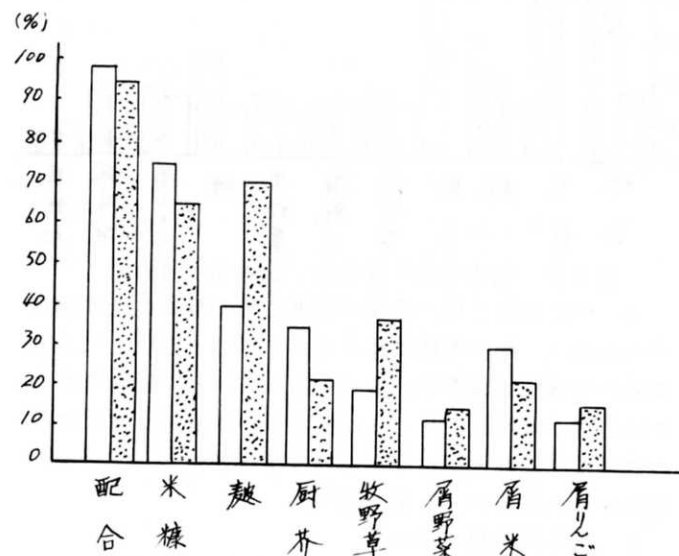
(3) 水田単作地域：この地域で注目されることは、配合飼料の使用例が多く、殆んどの農家が用いていることである。また他の地域では配合飼料は繁殖豚に対して重点的に用いる傾向が強いが、この地域ではそのようなことはない（第4図）。配合飼料の給与量については、飼養標準によつている農家は殆んど見られなかつた。

利用品目数は少なく、他に麦類、豆腐粕、馬鈴薯等が

若干用いられるが、一般に量的には配合および米糠が大部分を占めている。

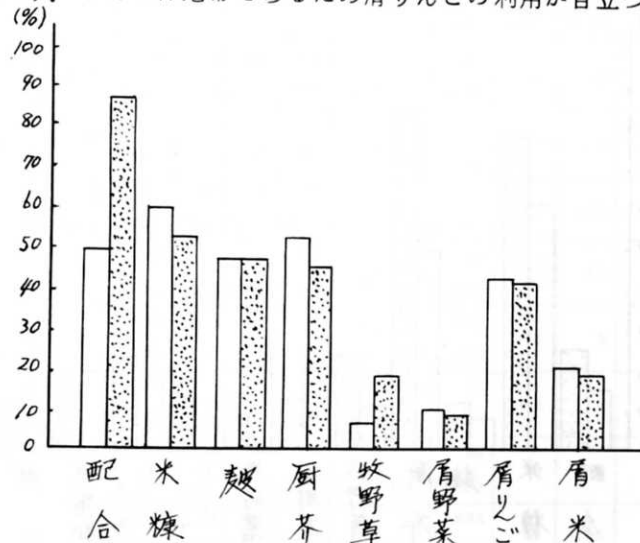


第3図 畑作地域（横浜町、六戸町）



第4図 水田単作地域（常盤村、田舎館村）

(4) 水田・りんご作地域：この地域は、実態は水田単作の場合と類似していて、用いる品目数も少ない（第5図）。りんご作地帯であるため肩りんごの利用が目立つ



第5図 水田・りんご作地域（板柳町、藤崎町）

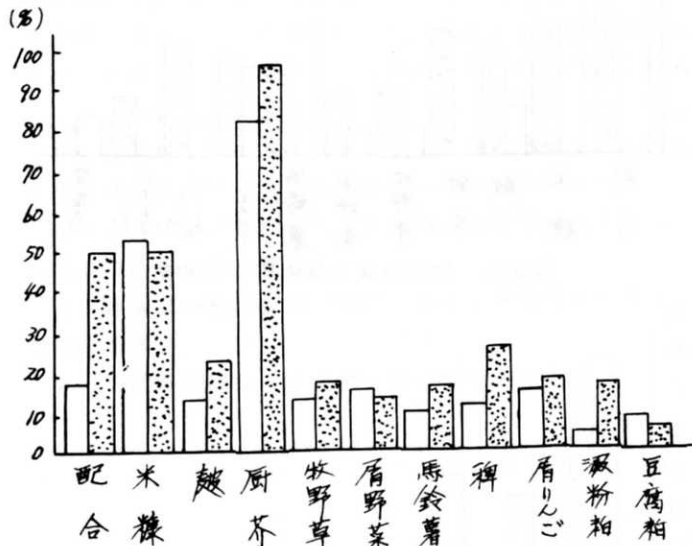
第2図 田畑混合地域（五戸町、百石町）

第4図 水田単作地域（常盤村、田舎館村）

第5図 水田・りんご作地域（板柳町、藤崎町）

が、その給与にあたってはサイレージにすることなく、生にそのまま用いるのが普通である。中には煮て給与する例もあり、これはかえって栄養的にも不合理なことである。

(5) 都市近郊：都市近郊農家に於ける養豚飼料の特徴は、配合飼料の使用が少なく、所謂残飯類が著しく利用されていることである。更に用いられる品目数の多いことも目立つことであつて、第6図に示されるもののほか、麦類、ビートトップ、ビートパルプ、豆腐粕、稗、屑米・デンプン粕、菓子屑等が用いられる。



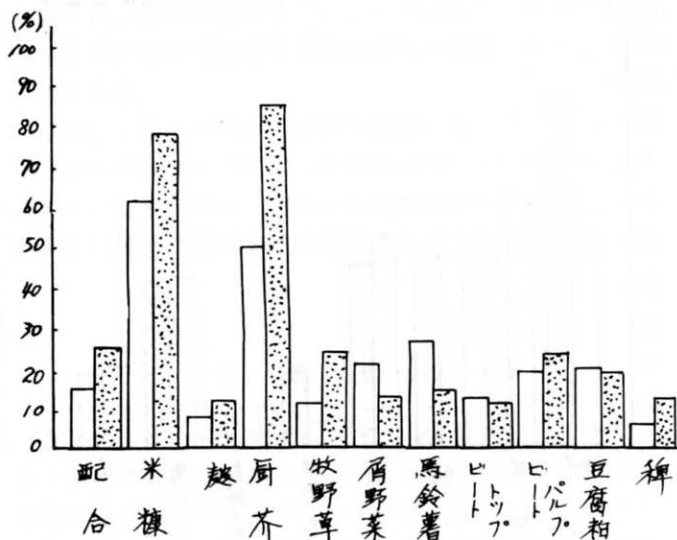
第6図 都市近郊（青森市，弘前市，八戸市）

(6) 沿海地域：特に沿海地域としての特異的な事例は見られない。その実態は都市近郊の場合と類似しており典型的な残飯養豚農家が殆どを占めている。配合飼料の使い方は、繁殖豚に対しては授乳中の母豚に、また肉豚については肥育末期にのみ用いる事が多い。

利用品目数は多い（第7図）。

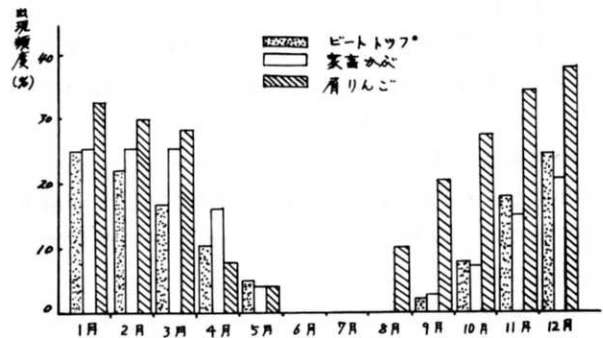
3 季節的変動について

購入飼料である配合、穀あるいは米糠、また馬鈴薯、とうもろこし等の圃場産物は年間を通じて大体恒常的に



第7図 沿海地域（大畑町，蟹田町，八戸市）

利用され、ビートトップ、家畜カブや屑りんごは、それらが出まわる時期に利用が限定されている。（第8図）これはサイレージ調整等による保存が行われていたためである。なお、これらの使用にあたっては、配合・米糠



第8図 月別利用状況

等を減量するのであるが、量的には全く考慮が払われず、一般に飼料給与法については計画性の著しい欠除が明らかである。

4. む す び

以上の結果から、田畑作地域と普通畑作地域とは、利用品目について殆ど同じ傾向にあり、水田単作と水田りんご作地域、更に都市近郊と沿海地域とが同様に類似した傾向をもつことが明かであり、飼料供給面との共通性の関係をあらわすものである。

なお、将来多頭飼育を行う場合、都市周辺の養豚農家では、豊富な残飯の計画的集荷と、加工によつた合理的利用が充分に考えられるものである。

田畑作、普通畑作地域では、サイレージ調整を行うとともに、配合飼料の増給によつて養分量の適正化をはかることが必要である。

参 考 文 献

- 1 畜産資料第41号（青森県）
「酪農における飼料構造の技術的経済的研究」
P 40
- 2 農業基本調査 昭和37年2月
- 3 東京都種畜場 試験調査報告（昭和37年度）
「厨芥添加飼料が肥育豚の発育並びに屠体成績に及ぼす影響について」P 65